

横浜市大岡川流域における都市形成の変遷に関する研究

正会員 ○岡 真由美*
同 中津 秀之**

都市河川 河川流域 都市形成
集落 都市軸

1. はじめに

都市が発展していく過程で、河川と人々の生活はさまざまな関係を築きあげてきた。農村では、河川から引き込んだ水路が人々の生活の軸として重要な空間になっていた。また河川は物流などの拠点として、人々の生活に深く関わっていた。しかし戦後から高度経済成長期にかけ、流域における農地が宅地へと変化していく過程で、河川に対する考え方が“生活利用”から“治水”へと変化してきた。こうして都市部における河川は、人々の生活から離れていった。本研究では、横浜市の大岡川流域における都市形成の変遷を、横浜開港後の明治から現代まで調査した。そして大岡川周辺における街と河川の関係がどのように変化し、現在のような状態となったかを解明する事を目的とした。

宅地化などの変遷を辿ってきた。研究を進める過程において、地形図により、水の流れ方・農地・人の住みつき方について調査した。まず、明治24年より約20年ごとに当該流域内における都市形成のエッジラインを導き出した。それは、特に顕著に見られるまちの境界を示したものである。そしてそのエッジラインによって流域の領域分けをした。また、エッジラインと大岡川の交点を結びこれを流域の長さとし、領域の変化を示す指標とした。土地区画整備や鉄道の開通、河川の埋め立てなどの開発は、完了まである程度の時間を有するものであることから、ひとつの開発行為でも年代をまたぐ場合がある。本研究ではそれらを、年代ごとのいち現象として捉える事とした。よってこれらの現象をパターン化する事で各領域における年代毎の都市変化の変遷を読むことが可能になると考えた。



図1 江戸中期の流域



図2 現在の流域

2. 研究の対象および方法

神奈川県横浜市の大岡川は、流域面積約35.6km²、延長約28kmを有する2級河川である。該当河川は、源流を市内南部の円海山とし、市内5つの区を通り東部の横浜港へ流れる。研究を進めるにあたり、明治24年、大正14年、昭和8年、同22年、同42年、平成2年、同11年に発行された地形図をもとに分析を試みた。横浜が港町として発展してきた課程において、埋め立てや農村の

都市形成 Edge Line

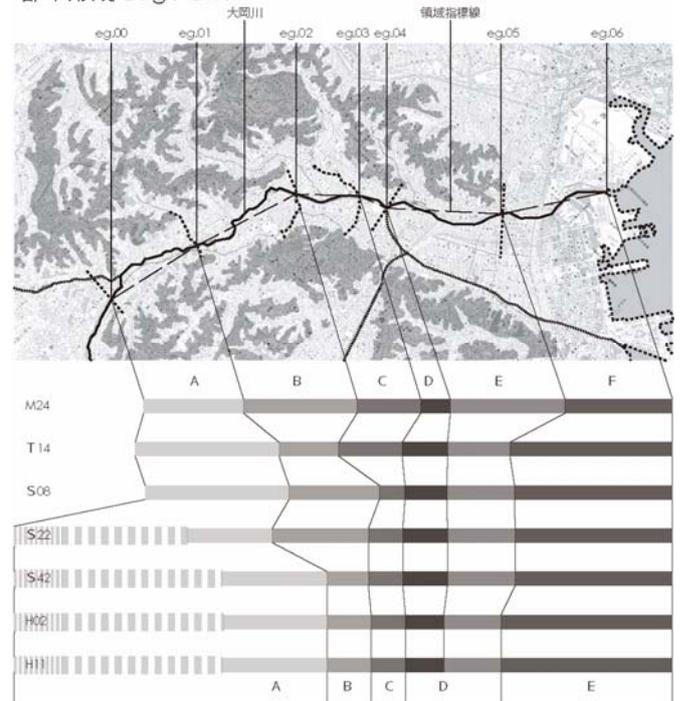


図3 都市形成のエッジと領域の変遷過程比較図

3. 領域の決定と変容過程の分析

領域の決定は都市形成のエッジの決定によってなされる。各年代の領域を比較したものが図3である。これより、次のような年代ごとの変化を見る事ができる。領域Aは昭和22年から同43年にかけて上流方向へ広がっている。また、領域B、C、Eは拡大・縮小を繰り返しながら領域を変化させてきた。領域Bは昭和42年、領域Cは昭和22年、領域Eは平成2年以降の変化が見られない。それぞれ明治24年よりも領域を縮小している傾向が見られる。一方、領域Fは領域Eの方向へ拡大している。変化は大正14年、平成2年に大きく見る事ができる。これは領域Fが、開港による都市形成、農地の急速な市街地化による影響によるものである。また、領域Dにはあまり変化が見られない。この領域は大正14年から工場地帯となり、その後宅地化され学校が多く建てられたエリアである。その影響が領域Eの境界と入り組んでいる事もあり、1つの領域としてみる事ができる。よって大岡川はA、B、C、D、Eの5つの領域に分節する事が出来ると考えられる。

4. 流域の領域別変容過程の分析

都市形成の過程で、領域内がどのような性格を持った地域であるか、を分析する事により、大岡川流域のまちがどのように現在のような状態になったかを見てみる。都市形成の傾向を表したものが図4である。

ここでは、それぞれ領域の特徴を明確にする為に、大岡川の兩岸を北側(N)・南側(S)に分け考察した。明治24年、領域A・Bにかけて農地が広がっているのが分かる。それに対し、領域D・Eは市街地化している。また、領域C・D・E間で市電の発達・衰退が見られる。平成2年以降、鉄道は京浜急行のみとなっている。この京浜急行と市電と交差しているエリアは、大正14年から昭和42年にかけて、まちがさまざまに変化していることが分かる。また、領域A・Bにかけて昭和22年まで広がっていた農村が、昭和42年に突如市街地化している。それとともに、領域Aより上流の地域は宅地化が進んだ。

5. まとめ

以上より、各領域別に都市形成の変遷をまとめると次のように考えられる。領域Aは、領域を上流に広げながら急激な都市開発が見られたことから、膨張的な都市形成がなされたと考えられる。領域Bは領域A・Cの都市開発には含まれ、その影響が大きく最終的に凝縮した。領域Cは工場地化や市街地化などを繰り返したが、江戸時代からの金沢道と交差する地域でもあり、周辺の地域との接点として機能していた事がわかる。領域Dは工場地化された後、学校が集まる地域として発展したが、高速道路などの発達により街が分断され、流域の分節点となっている。それぞれ更新の仕方・時期は違うが、今後はよりミクロな視点で大岡川流域における都市と河川の関係について明らかにしたいと考えている。

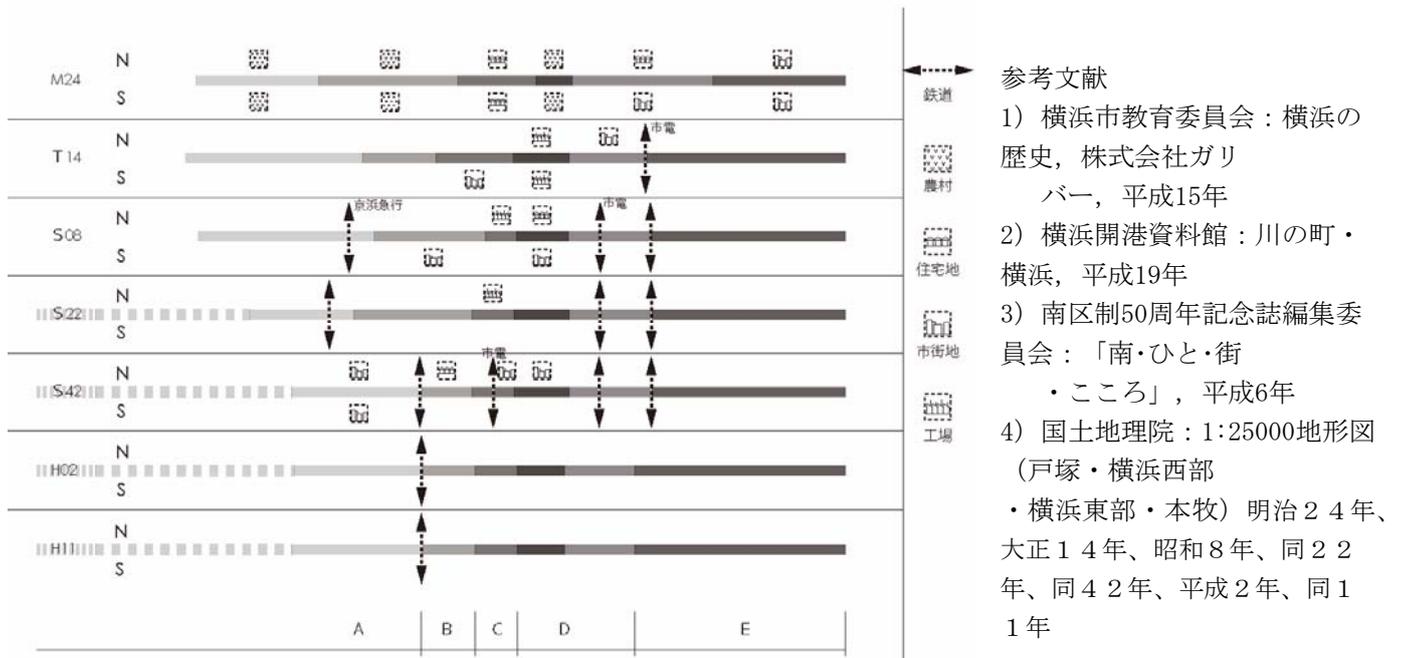


図4 都市形成の年代別変容比較図